

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22330185

研究課題名(和文) 保育・教育場面における社会性発達アセスメント・スケールの開発

研究課題名(英文) The Development of Social Development Assessment Scale for Children in Classroom Situation

研究代表者

本郷 一夫 (HONGO, Kazuo)

東北大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：30173652

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,700,000円、(間接経費) 3,810,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、保育・教育場面における社会性発達のアセスメント・スケールの開発を目的とした。社会性発達のアセスメント・スケールを作成し、担任保育士による評定された1544名の乳幼児のデータを収集した。

その結果、「気になる」子どもの特徴として、3歳未満児では「感情」、3歳児では「認知」と「集団行動」、5、6歳児では「子ども同士の関係」において、典型発達児との違いが大きかった。すなわち、年齢とともに「個人」-「集団」-「関係」へと問題の焦点が変化することが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the present study was to make the social development assessment scale for children in the classroom situation. We made the assessment scale and collected the data rated by nursery teachers of 1,544 children.

As a result, for "children who require special care", following characteristics were shown: The differences with the typically developing children was big in "feelings" in the under 3 years old children, "cognition" and "group behavior" in the 3 years old children, "the peer relations" in the 5 or 6 years old children. In other words, it was suggested that the focus of the problem changed to "personal" - "group" - "relations" with age.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：社会性発達 アセスメント・スケール 保育・教育場面 子ども

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、保育・教育場面においては、顕著な知的な遅れは認められないにもかかわらず、「自分の行動や感情をうまくコントロールできない」「対人的トラブルが多い」「集団活動に参加できない」といった特徴をもつ子ども、いわゆる「気になる」子どもへの対応が問題となってきている。このような「気になる」子どもの中に、後に、自閉症、ADHD、LD などとして診断される子どももいる。しかし、一方で、青年期になっても発達障害としては判定されず、適切な支援を受けないまま高校に進学するケースもある。したがって、障害の診断の有無にかかわらず、このような子どもの特徴を早期に理解し、継続的な支援していくためには、まず第1に、適切な発達アセスメントがなされる必要があると考えられる。

(2) 従来、「気になる」子どもや発達障害をもつ子どもの理解をするためには、個別式の直接検査である「知能検査」(WISC-、K-ABC、田中ビネー など)や「発達検査」(新版K式発達検査など)が多く用いられてきた。そして、主に認知の遅れや認知のアンバランスさの観点から、子どもの理解がなされてきた。しかし、上にも述べたように「気になる」子どもや発達障害をもつ子どもの中には、知的な遅れを示さない子どももいる。また、自閉症の子どもの中にも必ずしも知的な側面でのアンバランスさを示さない子どももいる。したがって、発達アセスメントに当たっては、検査場面における認知的側面のアセスメントだけでなく、日常生活場面における行動や対人関係といった社会性発達のアセスメントが重要となると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、保育・教育場面における社会性発達のアセスメント・スケールの開発を目指すものである。近年、保育・教育場面において、「気になる」子どもや発達障害をもつ子どもの理解と対応が一層求められるようになってきている。これらの子どもたちの特徴の一つとして、知的側面での遅れはないが、対人トラブルが多く、集団に適応しにくいといった点があげられる。したがって、知能検査によって認知の遅れやアンバランスさをいくら詳細に調べても、子どもに対する具体的な支援にはつながらない場合もある。むしろ、子どもたちが日常の生活を送る保育・教育場面における子どもの発達、とりわけ社会性の発達を捉えることが必要となる。そのような点から、本研究では、社会性発達のアセスメント・スケールの開発を目的とする。

3. 研究の方法

(1) 対象：1歳児 72名、2歳児 268名、3歳児 220名、4歳児 326名、5歳児 373名、6歳児 285名、計 1544名の乳幼児。

(2) 調査期間：2013年11月～2014年2月。

(3) 「子どもの社会性発達チェックリスト」を配布し、各クラスの担任保育士1名に子どもの発達状況をチェックしてもらった。

(4) 社会性発達チェックリストの構成：項目は5領域 114項目から構成された。すなわち、「子ども同士の関係」20項目、「集団行動」21項目、「言語」25項目、「認知」27項目、「感情」21項目である。各項目は、「できる」「できない」「わからない」の3段階でチェックされた。また、日常生活で「気になる」特徴があると感じられる子どもについては「気になる子どもの行動」14項目をチェックしてもらった。これらの項目は「気になる」「やや気になる」「気にならない」の3段階でチェックされた。

4. 研究成果

(1) 年齢による変化：領域ごとに、年齢別の「できる」項目数を検討した。1項目を1点として、得点化し、年齢×子どもの特徴(障害児、気になる子、典型発達児)の二元配置の分散分析を行った。その結果、5領域すべてにおいて、年齢、子どもの特徴の主効果及び交互作用が5%水準で、統計的に有意であった。

表1には、年齢ごとのチェックリスト得点が示されている。

表1 年齢ごとのチェックリスト得点

	子ども関係	集団行動	言語	認知	感情
1歳	2.93	3.80	3.92	1.73	4.41
2歳	5.64	6.06	6.60	5.12	7.98
3歳	9.03	10.74	12.1	12.4	12.7
4歳	14.75	15.75	17.1	17	17.2
5歳	18.15	19.54	21.3	21.8	19.4
6歳	19.35	20.69	23.4	23.9	20.1

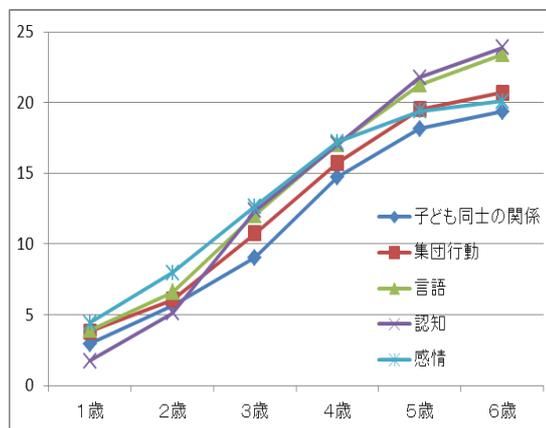


図1 チェックリスト得点の変化

(2) 子どもの特徴による分析：障害児 56名、気になる子 259名、典型児 1229名を対

象として、領域ごとに得点の違いを検討した。図2には、子どもの特徴別のチェックリストの得点が示されている。領域ごとに、子どもの特徴間の分散分析を行った結果、「子ども同士の関係」「集団行動」「感情」の領域においては、典型児>[障害児、気になる子]という関係が見られた。また、「言語」「認知」においては、典型児>気になる子という関係が認められた。障害児については、数が多いため、統計的な有意差が確認出来なかった領域もあるが、いずれの領域においても典型児>気になる子という関係が認められたと言えるであろう。

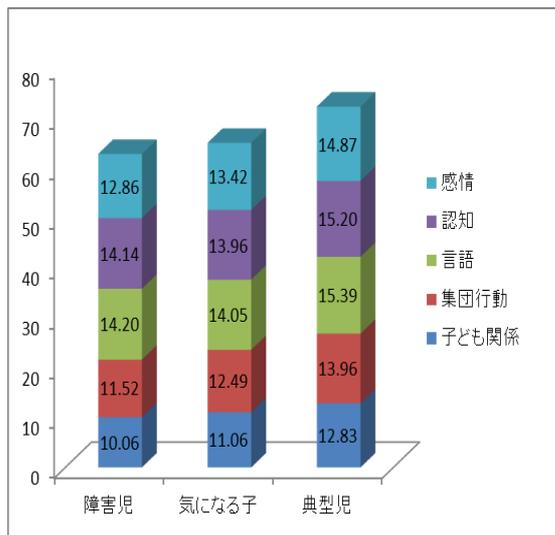


図2 子どもの特徴による比較

(3) 気になる子どもの特徴： 気になる子どもの割合： 子どもの年齢ではなく、クラス別に気になる子どもの割合を算出した。対象は1歳児クラス 239名、2歳児クラス 230名、3歳児クラス 256名、4歳児クラス 285名、5歳児クラス 285名である。その結果、図3に示すように、3歳児クラス、4歳児クラスに気になる子どもの割合が高かった。

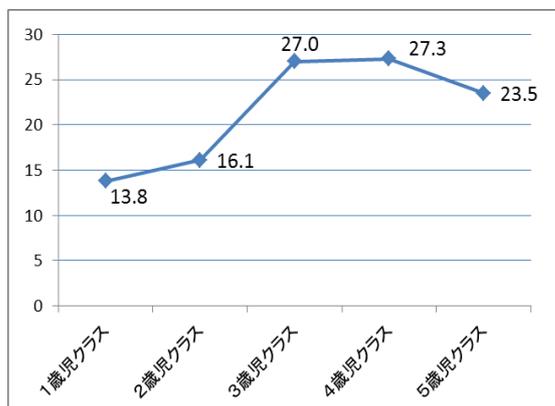


図3 気になる子どもの割合

気になる子どもの特徴的行動： 気になる子どもの行動特徴の年齢的变化は、いくつかのタイプに分けて、検討することができる。

タイプ1：すべての年齢群において「気になる」「やや気になる」を合わせた割合が50%を超える項目としては、「8.他のことが気になって保育者の話を最後まで聞けない」「14.周りの子どもにつられて騒いでしまう」の2項目があげられた。

タイプ2：年齢とともに上昇し、3歳児クラス、4歳児クラスでピークに達する項目としては、「5.味、音、感触などに敏感に反応する」(1歳児クラス：18.2%、2歳児クラス：22.2%、3歳児クラス：45.3%、4歳児クラス：41.9%、5歳児クラス：26.6%)、「6.自分の行った行動を認めようとせず、言い訳する」(1歳児クラス：25.0%、2歳児クラス：36.1%、3歳児クラス：63.5%、4歳児クラス：52.5%、5歳児クラス：53.0%)、「7.他児の行為に対して怒る」(1歳児クラス：28.1%、2歳児クラス：35.1%、3歳児クラス：56.3%、4歳児クラス：54.2%、5歳児クラス：48.4%)などがある。

タイプ3：一方、年齢とともに減少していく行動としては「9.『待ってて』などの指示に従えない」(1歳児クラス：63.3%、2歳児クラス：50.0%、3歳児クラス：57.1%、4歳児クラス：41.9%、5歳児クラス：34.9%)、「12.集団で移動する時、ついてこない」(1歳児クラス：57.6%、2歳児クラス：50.0%、3歳児クラス：49.2%、4歳児クラス：46.9%、5歳児クラス：35.9%)などがあげられる。図4には各タイプの典型的な項目の変化が示されている。

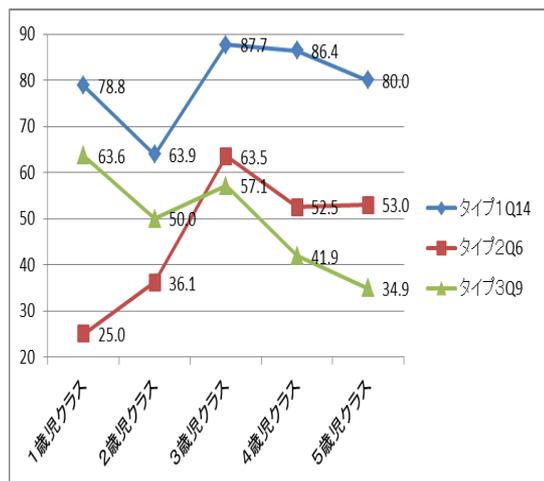


図4 気になる行動の変化

(4) 社会性行動チェックリストにおける気になる子どもの特徴： 各年齢段階における気になる子どもの行動特徴を明らかにするために、社会性発達チェックリストの領域ごとに各年齢における典型発達児と気になる子どもの得点を比較した。その結果が図5に示されている。

ここから、年齢段階では3歳児、4歳児において、典型発達児と気になる子どもの行動特徴の違いが大きいと考えられる。年齢と領域との関係を見ると、1歳児、2歳児におい

ては「感情」(各々1.51、1.19)における得点の差が比較的大きかった。3歳児では「認知」(2.70)、「集団行動」(2.61)、4歳児では「子ども同士の関係」(3.05)、「感情」(2.68)、5歳、6歳では「子ども同士の関係」(各々2.54、1.79)で典型発達児と気になる子どもの得点の差が大きくなっていった。

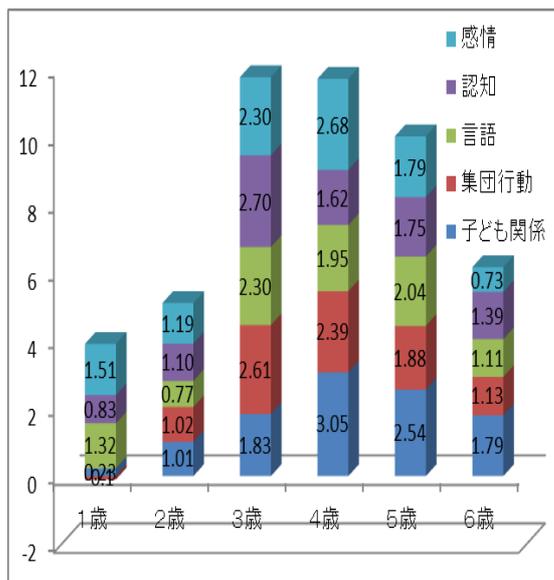


図5 典型発達児と気になる子どもの得点の差

以上のことから、気になる子どもの行動特徴を明らかにするためには、年齢によって着目する領域が異なると言える。すなわち、3歳未満児では「感情」に、3歳児では「認知」と「集団行動」に、5、6歳では「子ども同士の関係」に焦点を当てて、子どもの特徴を捉える必要があると言える。すなわち、年齢とともに「個人」-「集団」-「関係」へと問題の焦点が変化すると考えられる。その点で、従来、知能検査や発達検査で捉えられていた認知や言語の発達の側面だけでなく、子ども同士の関係や集団での振る舞いなどに着目しながら子どもの発達と適応を捉えることが重要だと考えられる。さらに、そのアセスメント結果に基づき、個別の保育・教育支援計画を立てていくことが求められる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 12 件)

岡本依子・菅野幸恵・東海林麗香・高橋千枝・八木下暁子・青木弥生・石川あゆち・亀井美弥子・川田学・須田治(2014)親はどのように乳児とコミュニケーションするか：前言語期の親子コミュニケーションにおける代弁的機能。発達心理学研究, 25, 23 ~ 37. 査読有。

須田治(2014)「この世的に生きる」ためのアスペルガー症候群支援。首都大学東京

人文科学研究科『人文学報』, 485, 1-20. 査読無。

陳 晶晶・長崎勤・庄司一子・茂呂雄二(2013)日中子どもの未来展望：子どもの未来への楽しみと心配に関する日中比較。筑波大学心理学研究, 46, 17-29. 査読なし。

須田治(2013)自閉症スペクトラム障害への「お芝居療法」---その2不安と緊張の緩和プロセスの分析。首都大学東京『人文学報』470, 11-20. 査読無。

矢口幸康・関あゆみ・田中大介・谷中久和・寺川志奈子・小林勝年・高橋千枝・小枝達也・内山仁志・田丸敏高(2013)母親が評価する子供の学習困難に影響する要因の検討。小児保健, 72, 799-804. 査読有。

本郷一夫(2013)保育・教育の場におけるチェックリストを用いた実践研究の進め方。臨床発達心理学実践研究, 8, 17-20. 査読有。

本郷一夫。(2013)震災と子ども 東日本大震災後の保育所の子どもと保護者の姿。家族心理学年報 31, 160-170. 査読無。

神谷哲司(2012)保育現場における「対応の難しい親」はなぜ産み出されたのか？-家庭支援、保護者対応に関する研究動向からの一考察-。Asian Journal of Human Services, 3, 1-15. 査読有。

仲野真史・長崎勤(2012)幼児期における語りの構造の発達。発達心理学研究, 23, 66-74. 査読有。

本郷一夫。(2012)東日本大震災後の教師支援の実際と課題 「ケア・宮城」の活動を通して。臨床発達心理実践研究, 7, 19-23. 査読有。

田中大介・関あゆみ・内山仁志・寺川志奈子・高橋千枝・小枝達也(2012)発達の困難さとQOL。子どもの健康科学, 13, 59-65. 査読有。

相澤雅文・本郷一夫(2011)「気になる」児童の学級集団適応に関する研究 「気になる」児童のチェックリストとhyper-QUを通して。LD研究, 20, 352-364. 査読有。

〔学会発表〕(計 13 件)

相澤雅文(2013)発達障害と学習保障。日本LD学会第22回大会。10月13日。横浜国際会議場。

HONGO, K.(2013) A Study of the Effect of the Great East Japan Earthquake on Nursery School Children. 16th European Conference of Developmental Psychology. 9月5日。University of Lausanne, Switzerland。

長崎勤(2013)SCERTSモデルによる自閉症児への早期発達支援(10)-ボール運び協同活動課題への目標の埋め込み-。日本特殊教育学会第51回大会。9月1日。明星大学。

本郷一夫(2013)東日本大震災における乳幼児・児童のストレスとその対応2 保育士が捉えた震11か月後の子どもと保護者の姿。日本発達心理学会第24回大会。3月

16日・明治学院大学。

澤江幸則(2013)自閉症スペクトラム障害児における「不器用さ」の特性について - MovementABC2nd とその他のアセスメント結果をもとに - . 日本発達心理学会第 24 回大会 . 3月16日 . 明治学院大学

澤江幸則(2012)保育巡回相談ガイドライン : 3歳児用行動チェックリストの検討 . 日本教育心理学会第 54 回総会 . 11月24日 . 琉球大学 .

相澤雅文(2012)学級集団への適応に課題をかかえる児童に関する研究(3) . 日本教育心理学会第 54 回総会 . 11月24日 . 琉球大学 .

秦野悦子(2012)保育活動参加に関する行動アセスメント(1) . 日本特殊教育学会第 50 回大会 . 9月28日 . つくば国際会議場

Hongo, K. (2012) A Study of the Effect of the Great East Japan Earthquake on Primary School Children . ISSBD 22th Biennial Meeting . 7月12日 . University of Alberta, Canada .

相澤雅文(2012)集団適応に課題がある児童の縦断的研究(1) 「気になる」児童のチェックリストと心理尺度「Q-U」との関連から . 日本発達心理学会第 23 回大会 . 3月9日 . 名古屋国際会議場 .

本郷一夫(2012) . 東日本大震災における乳幼児・児童のストレスとその対応 1 - 保育士が捉えた震災 2 か月間の子どもの姿 . 日本発達心理学会第 23 回大会 . 3月9日 . 名古屋国際会議場 .

相澤雅文(2011) . 学級集団への適応に課題を抱える児童に関する研究(2) 下学年(1~3年生)と上学年(4~6年生)の比較から . 日本特殊教育学会第 49 回大会 . 9月25日 . 弘前大学 .

Hongo, K. (2011) . The Relationship between the developmental Characteristic and the Behavior Problem of Nursery School Children who Require Special Care . ECDP 15th . 8月26日 . University of Bergen Norway .

〔図書〕(計 12 件)

須田治(2014)自閉症スペクトラムへのもう一つの発達臨床 . 印刷中 . 金子書房 .

本郷一夫(2013)障害と支援 . 無藤隆・子安増生(編)『発達心理学』第 5 章 . 287-314 . 東京大学出版会 .

長崎勤(2013)社会性・人間関係の発達と支援とは何か? 長崎勤・森 正樹・高橋千枝(編著)『シリーズ:発達支援のユニバーサルデザイン 第 1 巻 社会性発達支援のユニバーサルデザイン』序章 1-7 . 金子書房 .

長崎勤(2013)共同行為の始まり:初期社会的認知発達と課題 長崎勤・森 正樹・高橋千枝(編著)『シリーズ:発達支援のユニバーサルデザイン 第 1 巻 社会性発達支援のユニバーサルデザイン』第 1 章 pp13-20 . 金子書房 .

高橋千枝(2013)保育の中での人間関係・社会性発達の課題と支援(1)-協同活動,目的の共有,イメージの共有,集団の適応- . 長崎勤・森正樹・高橋千枝編『シリーズ:発達支援のユニバーサルデザイン 第 1 巻 社会性発達支援のユニバーサルデザイン』第 5 章 . 55-64 . 金子書房 .

本郷一夫(2013)震災と子ども 東日本大震災後の保育所の子どもと保護者の姿 . 日本家族心理学会(編)『現代の結婚・離婚』, 家族心理学年報, 31, 160-170 . 金子書房 .

相澤雅文(2013)小集団活動の役割 . 『地域で取り組む小集団活動マニュアル -発達障害児のソーシャルスキルを育むために』 . 12-17 . 京都教育大学 .

本郷一夫(2012)仲間関係の発達支援 . 日本発達心理学会(編)『発達科学ハンドブック 6 発達と支援』, 第 15 章 . 156-163 . 新曜社 .

本郷一夫・吉中 淳(2012)保育の場における「気になる」子どもの発見 発達「ズレ」と集団適応との関連 . 本郷一夫 編著『認知発達のアンバランスの発見とその支援』第 3 章 . 59-88 . 金子書房 .

澤江幸則(2012)運動発達の問題・障害と支援 . 日本発達心理学会(編)無藤隆・長崎勤(共編)『発達心理学ハンドブック 第 6 巻 発達と支援』, 第 21 章 . 219-230 . 新曜社 .

長崎勤(2012)発達支援のスペクトラムと包括的アセスメント 日本発達心理学会(編)無藤隆・長崎勤(共編)『発達心理学ハンドブック 第 6 巻 発達と支援』, 第 2 章 22-31 . 新曜社 .

秦野悦子(2012)乳幼児期の言語発達とその障害 . (共編)『発達心理学ハンドブック 第 6 巻 発達と支援』 . 175-185 . 新曜社 .

6 . 研究組織

(1)研究代表者

本郷 一夫 (HONGO, Kazuo)
東北大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号 : 30173652

(2)研究分担者

秦野 悦子 (HATANO, Etsuko)
白百合女子大学・文学部・教授
研究者番号 : 50114921

長崎 勤 (NAGASAKI, Tsutomu)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号 : 80172518

須田 治 (SUDA, Osamu)
首都大学東京・人文科学研究科・教授
研究者番号 : 50132098

澤江 幸則 (SAWAE, Yukinori)
筑波大学・体育系・准教授
研究者番号 : 20364846

相澤 雅文 (AIZAWA, Masafumi)
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号：10515092

高橋 千枝 (TAKAHASHI, Chie)
鳥取大学・地域学部・准教授
研究者番号：00412916

神谷 哲司 (KAMIYA, Tetsuji)
東北大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：60352548